令和8年度　第1回　生駒市公益活動アドバイザー会議録

開催日時　令和8年4月18日（土）　9：30～13：00
開催場所　生駒市市民活動推進センターららポート研修室
出席者
（アドバイザー）　佐藤由美氏、田中晃代氏、土坂のりこ氏、山納洋氏（五十音順）
（事務局）　地域活力創生部次長　梅谷、地域コミュニティ推進課長　石田、
市民活動推進センター所長　和田、係長　鈴木、係員　西田・河端、
市民活動コーディネーター　池邨・泉森・宮平
（傍聴者）　なし

案件
1　座長の選出
2　地域活動応援補助金「まちのわ」について
3　地域活動応援補助金「まちのわ」の申請事業に対する助言

以下、発言要旨
案件1　座長の選出
佐藤由美氏が座長に選出

案件2　地域活動応援補助金「まちのわ」について
まちのわ応募状況について事務局から説明

案件3　地域活動応援補助金「まちのわ」の申請事業に対する助言
（1）一般社団法人　和草
【申請者とアドバイザーの質疑応答】
（アドバイザー）　こどもアドボカシーにつながる重要な入口事業だと思っています。ただ、誰がその講座をするのか、誰がその対話の場を作るのかについて、補足説明をいただきたいのですが、学びの会の講師は全て同じ方ですか。
（申請者）　性教育については、フリースクール和草で2年ほどかけて作り上げた独自の資料があります。自分たちで作り上げながら、最終的には大阪のソーシャルワーカーさんのまとめでアウトプットしたいと思っています。
（アドバイザー）　他のドラッグや金融教育については、これから資料を作られるのですか。
（申請者）　金融と保険については、少年院で働いておられた元警察官の方にお話しいただきます。少年院で勤務される中で、こどもたちのお金に対する知識が足りていないことによる再犯率の多さと高さに危機感を抱き、こどもたちにお金の話をしたいと思われました。現在は保険会社に勤務されており、金融と保険についてはその方にお任せしようと思っています。ドラッグにつ

いては、その怖さを知っている方に講師を依頼します。

（アドバイザー）　その方たちに対して、講座講師謝礼の5，000円を支払われるということですか。

（申請者）　そうです。

（アドバイザー）　予算書内の講座講師謝礼10，000円×10回は、対話カフェ分でしょうか。

（申請者）　10，000円の方が専門講師です。

（アドバイザー）　10回と記載されていますが、対話カフェの部分も含め、10回来られるということでしょうか。

（申請者）　そのとおりです。

（アドバイザー）　「場」というのがとても重要で、特に「対話カフェ」による対話の会議においては、「ここで発言してもいいんだ」「大丈夫だ」と認識できる場であることが重要です。会場のしおのめハウスは、一般社団法人和草の代表が持ち主の持ち家でしょうか。

（申請者）　違います。

（アドバイザー）　いつも賃借料を払って借りられているのですね。

（申請者）　そうです。

（アドバイザー）　事業の対象者である中高生が参加してくれるかが気になるのですが、既につながっている中高生に声をかけるのでしょうか。

（申請者）　まずはフリースクール和草に通うこどもたちに声掛けをします。さらに、SNS発信やつながりのある高校生に少しずつ声をかける予定です。

（アドバイザー）　ぜひボランティアに来ているこどもたちにも参加してほしいですね。

（申請者）　こども食堂事業にボランティア参加してくれている高校生からも意見を聞きながら準備を進めます。

（アドバイザー）　今回は、一般社団法人として取り組もうとされていますが、同じミッションを持って活動している団体は他にもあり、こども家庭センターや学校で類似事業が実施されていてもおかしくないです。例えば、生野南小学校（現・田島南小中一貫校）では、「生きる教育」という取り組みで、性教育のことを小学校の頃から教えていました。つまり、学校と連携して実施してもおかしくはないなと思うのですが、これを和草として独自に実施するというプランを書いておられますが、将来的に行政や学校と連携していくイメージはお持ちですか。

（申請者）　イメージは持っています。学校で先生から、こどもたちの受け入れ方が少し違うという声も聞きます。学校外の大人だから言いやすいということも狙いの一つです。将来的には、学校と連携していけたらいいなと思います。

（アドバイザー）　集客の時にも力強いですね。

（申請者）　まずは私たちで土台を作り耕して、いずれは連携できればいいなと思います。

（2）真弓ロビンズ

【申請者とアドバイザーの質疑応答】

（アドバイザー）　昨年度に運営体制の強化について助言しましたが、今年度は選手コースの充実や指導者の強化などは、どのようにお考えでしょうか。

（申請者）　3，000円の選手コースと1，500円のスクールコースがあり、今年度は参加者が増えて選手コース18名、スクールコース3名です。新中学1年生のこどもたちに告知し、ハンドボールを知ってもらう機会を得て、多くのこどもたちに参加してほしいと思っています。そのためにすぐーるとSNSを活用したいです。

（アドバイザー）　選手コースあるいはスクールコースに参加されるためにはSNSの他に口コミも必要だと思います。また、月々3，000円の会費は、参加したくても金銭的に難しい学生がいる可能性もあると思いますが、いかがでしょうか。

（申請者）　会費が高いから参加できないという話は今のところ聞いていません。もしそのような話があれば、柔軟に対応したいと思います。

（アドバイザー）　人それぞれお金の価値は異なり、保護者の中にはスポーツより教育にお金をかけたいと考える人もいるため、ニーズに応じたサポートが必要だと思います。また、将来的にこどもの数が減る中で、団体の活動資金が必要になる可能性がありますが、代替手段については、どのようにお考えでしょうか。

（申請者）　生駒市はハンドボールが盛んで、2031年に奈良県で実施される国民スポーツ大会に向けても注目されています。団体としては、中学・高校・大学・指導者まで育つ環境を整え、楽しさを重視しながら継続して活動したいと考えており、現在小学生のハンドボールクラブチームに入っているこどもも、中学生になった時に入りたいと思ってもらえるチームにしたいと思っています。

（アドバイザー）　中高生の間スポーツをずっとやっておられた大学生は、忍耐力やコミュニケーション能力も非常に高いと感じます。学校機関との関係性を教えてください。

（申請者）　現在は中学生を教えていますが、大阪府や奈良県内の高校生との合同練習に参加させてもらうつながりを持っています。また、高校生が企画するオリジナルの合同練習会や試合にも参加しており、真弓ロビンズに所属する中学生が、その高校に進んでみたいと思えるように、幅広く連携していきたいです。

（アドバイザー）　大学でも部活動を経験した学生は、楽しさや人間性の成長が得られる一方で、授業との両立が難しい場合もあり、スポーツで培った力を学習にいかすのが難しいこともあります。学校としてもスポーツの教育的価値を考える必要がありますが、ビジョンはお持ちでしょうか。

（申請者）　学校の部活動がなくなる方向性になっているため、真弓ロビンズも受け皿になり、安心してハンドボールができるような場所にしたいです。

（アドバイザー）　昨年度は、練習場所の確保が大変だという話でしたが、今年度は小学校の体育館も使えるようになったということですね。収支予算書では、使用料2，305円と書いてありますが、費用は一律ですか。

（申請者）　小学校の使用料は一回500円です。

（アドバイザー）　それでは予算は低くなりますか。

（申請者）　これまでの練習会に加えて小学校体育館で実施する予定です。今までどおり体育館を使用して練習する分は2，305円です。全面借りた場合と半面の場合では値段が異なります。

（アドバイザー）　予定がはっきりわかった段階で、予算の立て直しは考えておられますか。

（申請者）　収支もきちんとつけていきます。

（3）はばたきみなくる食堂

【申請者とアドバイザーの質疑応答】

（アドバイザー）　組織のメンバーについて興味があります。多世代ということですが、生駒市が主催された講習会で集まった方たちですか。

（申請者）　そうです。

（アドバイザー）　講座参加者11名は全員でしょうか。

（申請者）　講座受講者は約40名でしたが、団体メンバーになったのが11名です。

（アドバイザー）　メンバーが多世代ということにも関心があるのですが、いわゆるニュータウンといった住宅地として開かれたところで数十年前に住み始めた世代と、最近子育てで引っ越ししてきた方たちが混じっているということですね。

（申請者）　そのとおりです。

（アドバイザー）　こども食堂の活動を通じて、地域の人が知り合いになるという環境を作っていきたいということでしょうか。

（申請者）　そこが重点です。

（アドバイザー）　こども食堂というのは、既に広がっている事業ですが、こどもの貧困対策という意味合いは薄まっていると思います。貧困を意識させないよう「みんな食堂」や「地域食堂」と呼んでいるところもあります。今回こども食堂と位置づけていますが、改めてミッションを聞かせてください。

（申請者）　こども食堂ではありますが、会場となる北コミュニティセンターISTAはばたきの「はばたき」と、みんなが来てくれる、みんなでミラクルを起こすという意味合いを掛け合わせた「はばたきみなくる食堂」という名前をつけました。

（アドバイザー）　こどもから高齢者までが安心できる居場所ということなので、プラットフォームを作るということだと思いますが、そこから先、どんなことが起きれば

いいと思いますか。

（申請者）　地域の人同士が助け合い、つながれる場を作りたいと思いました。

（アドバイザー）　既存の自治会や町内会を超えて、こども食堂を軸にした新しいコミュニティを作り、助け合いやつながりを広げることについて、発展の展望は考えていますか。

（申請者）　はじめは参加者が集まるかどうか不安ですが、こどもはもちろん、大人も潤わなければ反映できないので、まずは親の楽しめる場を作っていきたいと思います。徐々に、口コミやすぐーるを活用し、小中学生を育てる保護者の目に届くように配信すれば、子育て世代とつながり、何か新しいことができるのではないかと思います。

（アドバイザー）　今後の発展について考える際に、開催頻度やメニュー、参加者の対象を広げたり、プログラムを増やしたりというような具体的な事業計画が必要になるときがきます。そのような困難になった時に、現メンバーは前向きに捉えて話し合える雰囲気ですか。

（申請者）　ご飯だけでなく昔遊びができる、居場所づくりを考えています。食べてすぐ帰ると滞在時間が短くなるので、頭を使って遊べるものや、メンバーが多世代なのでお手玉やけん玉などもできればいいなという話が出ています。

（アドバイザー）　メニューのバリエーションについてはいかがでしょうか。

（申請者）　最初はコスト面や誰もが好きなメニューということでカレーを提供しますがアンケートをとり、参加者の意見を取り入れつつ、改善していけるメンバーです。多世代で、年齢に幅がある分、提案できるものがあると考えています。

（アドバイザー）　類似のこども食堂は既にたくさんあると思いますが、そういったところから教訓やアドバイスは受けていますか。例えば予約制にしないと料理があまるとか。

（申請者）　その理由で限定40名としました。

（アドバイザー）　最初からこども食堂で進めるのか、いずれは多世代食堂として主催者だけでなく参加者も多世代に広げていくといった展望はお考えですか。

（申請者）　大人の分も用意はします。

（アドバイザー）　おそらくこどもを連れてくるお母さんが食べる分だと思いますが。

（申請者）　大人だけでも参加して欲しいと思っています。例えば幼稚園時代のママ友や、久しぶりに会う方たちの場として、「あそこにいるよ」みたいな感じでワイワイしてもらう部分もあっていいと感じています。

（アドバイザー）　PRの仕方がとても重要だと思うので、しっかり検討してください。

（4）生駒オーガニック給食推進委員会

【申請者とアドバイザーの質疑応答】

（アドバイザー）　「恵みつながるファーマーズマルシェ生駒」ですね。既に2回実施されていて、5月が3回目ですね。インスタグラムを拝見したところ、生駒市の出店者は非常に少なく、奈良県全体を視野に入れる必要があると感じました。地産地消を考える場合、一つの市だけでは範囲が狭く、京都のように府全体や県全体で取り組む視点が重要です。この補助金は市内の活動が対象ですが、生駒市の課題に当てはめると、取り組みの規模や意図が小さく見えて、本来の団体の活動内容にそぐわないのではないかと感じます。生駒市の有機農業の生産者さんは、今何人おられますか。

（申請者）　農民運動奈良県連合会とつながっていますが、実際に有機農業をしている人数は把握ができない状態にあるそうです。小さい農家は申請をしないので、有機で作っていても数に上がらないということです。

（アドバイザー）　わかりました。このような事情がある場合、例えば、「私たちは何を有機と認定するか」という視点から独自にアプローチし、市民やママ目線で認める「生駒市ママ認証」のようなものを付与することも可能です。生産者と消費者をつなぐことは重要ですが、消費者が選択できるようにするためには、安定した供給や定期的な販売の場が必要であり、年2回のイベントだけでは日常的な選択にはつながりません。そのため、流通を促進する仕組みを考えることも重要です。

（申請者）　現在、教育委員会や農林課と連携して、給食にどれだけ有機食材を取り入れられるかの取り組みを進めています。制約はありますが、地域の農家と協力しながら徐々に増やしていく方向です。「有機＝農薬を使わない」というだけでなく、命を豊かにする農業全体を大切にする視点で、完全排除ではなく段階的に導入していくことを教育委員会に伝え、相談を重ねています。今後の予算や計画についても、コラボをしている農民連や市の農林課と教育委員会を含む関係者で継続的に話し合っている段階です。

（アドバイザー）　ただし、この事業はあくまでもマルシェと体験の事業ですよね。

（申請者）　そうです。来年はさらに大きくしていきたいと思います。

（アドバイザー）　事業を大きくすればいいということではなく、その先に市民のアドボカシーがあります。例えば政策の提案となると、客観的な数値が必要ですが、それを今皆さんは持っていないということですね。これを自分たちで取りに行く必要があります。人とのつながりの中で情報を取りに行く過程で、市の課題が見えてくるのではないかと思います。今年度1年間、マルシェ事業をしながら、そのようなアンテナも立ててください。

（アドバイザー）　壮大な中身で非常に難しいテーマだと思います。農家と市民の生活スタイルを両輪で向上していかないといけない。今年度マルシェをする際のターゲット層や出店者への協力の仰ぎ方を教えてください。

（申請者）　基本的には生駒市で採れたものか、奈良県内で採れた野菜を使ったお弁当やスイーツを作ってもらい、その野菜はだれが作ったか紹介することで

循環できるような形を検討しています。私たちの活動には、長年参加している仲間やボランティアが多く、横のつながりも強いため、出店者を集めることには心配ありません。

（アドバイザー）　出店するにあたり、農家との連携や協議の場は充分にありますか。

（申請者）　基本的には12月と5月の田植え前などの閑散期にマルシェを実施しています。

（アドバイザー）　マルシェに出店する個人と農家とのマッチングや、出店者同士が交流して新しいアイデアや手法が生まれるような場はありますか。

（申請者）　前回はお漬物屋さんが出店されましたが、残った糠床を隣で出店していたスイーツのお店がもらって利用するということがありました。新しいつながりの一つです。

（アドバイザー）　社会という規模の大きい話だけでなく、そのように手をつなぐと次のステップに進めるかということも調査しながら広げていってほしいです。非常に期待しています。

（アドバイザー）　農家の環境ですが、有機農業は周囲に慣行農法の農家が多い中で続けるのが大変であり、支えてくれる人をどのように見つけるかが課題です。マルシェだけでなく、農繁期の手伝いやCSA（地域支援型農業）のような仕組み、学校給食など市場を活用して農家を支える方法が様々ありますが、どのようにイメージされているか教えてください。

（申請者）　マルシェ以外にも年間を通して野菜や大豆の使用、農作業体験などを行っています。ただし、農家にとって手伝いが負担になる場合もあるため、購入や知ることを通じて応援することが一番です。有機農業と慣行農業を行う農家が混在しているため、オーガニックに偏らず、食の大切さを前面に出して、農家を応援する形でマルシェを運営しています。応援してくださる農家の野菜を買う流れを、体験や講座を通して応援につなげていきたいと考えています。

（アドバイザー）　農家さんたちが望んでいることや進めてほしいと思われていることはありますか。

（申請者）　知ってもらうということです。美味しいというのは農家さんの自慢や自信になります。感想を直接届けたいという思いがあるので、ファーマーズマルシェで、この野菜はこの農家さんが作られましたと話をすると、農家さんのところへ行って「美味しかった」という会話がうまれ、励みにつながります。マルシェでのやりとりを通じて農家さんの思い、こどもの声や心が届くというのがすごく大事です。

（5）てらおさんのチャイと絵本の出張カフェ

【申請者とアドバイザーの質疑応答】

（アドバイザー）　既に活動を始められていますが、主にお一人で運営されているのですか。
（申請者）　今は一人です。
（アドバイザー）　ゼミを受講されているので、どのように活動するかというビジョンはお持ちだと思います。目的にある孤立感を和らげたり、自然なつながりが生まれたりということと、チャイを飲みながら絵本を読む関係性について、本当に孤独感がなくなるといったプロセスをお聞かせください。
（申請者）　「孤独感がある人来てください」「寂しい人来てください」というように呼びかけても、きっと人は来てくれないと思います。まだ気付いていない人もたくさんいる一方で、人とつながりたいと思っている人もいます。柔らかな雰囲気で、気軽にお茶を飲みに行ける場所を作りたいという思いから、チャイと絵本になりました。入口はチャイと絵本ですが、大人もホッとできる絵本がたくさんあり、1冊開くと少し気持ちが軽くなります。
（アドバイザー）　まずは、チャイか絵本が好きな人が来られると思いますが、そのような人は一人というより友達と複数人で参加されることが多いと思います。そうなると、チャイや絵本の魅力より、お喋りする場所が欲しい人が参加するイメージがあります。4月13日に開催された時はいかがでしたか。
（申請者）　知り合いの参加が多かったですが、SNSをご覧になったお母さんと幼稚園児の親子も参加されました。絵本を次々お母さんに読んでもらって過ごされました。会場となったSTAYCYもオープンしたところで、オーナーとも会話を楽しむ雰囲気でした。
（アドバイザー）　そのような人はもっと増えると感じましたか。
（申請者）　1年間自分も楽しみながら続けて、どうしたら参加者が増えるのかも考えていきたいです。一人では参加しにくいという人のために、MYSINGカフェではお一人様の日を設定し実施しようと考えています。
（アドバイザー）　団体立ち上げの初期段階においては、どこにPRするかがすごく大事になります。目的にぴったり合う対象にPRされるのがよいと思います。
（申請者）　わかりました。
（アドバイザー）　活動を始めたばかりの手探り状態で、まずこの補助金を申請しようと思ったのはなぜですか。
（申請者）　活動を続けていくには、資金面で無理のない計画を立てるのが一番だと思いました。私の場合は実施する場所が限られていますので、会場の使用料が発生します。会場費の助成があれば大変ありがたいですし、市の補助事業として信頼を持って集客できると考えました。
（アドバイザー）　この活動が上手く進んだ際に、仕事に行けなくなった人や子育てや介護で悩んでいる人など、様々な悩みを抱えた人が来られると想定されます。いろいろな相談をされた時には、どのように対処しますか。
（申請者）　立ち上げ当初で、今は私一人で運営していますが、クリエイティブゼミを一緒に受講した仲間がたくさんいて、どういうことができるかという話はして

います。その仲間たちと一緒に活動していくことも考えています。参加者の話を団体として受け止められる内容なのか、然るべきところにつなぐ内容なのかは見極める必要があります。

（アドバイザー）　活動にそのような意味合いが出てきた際には、コミュニティソーシャルワーカー的な動き方が求められると思います。そのような体制も必要になると思いました。

（申請者）　わかりました。今後考えたいと思います。

（アドバイザー）　絵本を置くだけではなく読み聞かせまで行うと、こども向けだというアピールになるので、子育て層との接点が大事になってくると思います。今は大人も読める絵本ということをPRされているので、対象者のイメージがわかりにくいと感じました。もし対象者を明確にするなら、もう少し企画を出したほうがよいですね。

（申請者）　読み聞かせの会、絵本作りやオリジナルチャイ作りのワークショップ、裁縫しながらお話をする会といった形で、場を作っていきたいと考えています。

★前半総括

（山納氏）　活動として誰と組むのか、公が実施したほうがよいのではないか、他機関との連携をどのようにイメージされているのかという方向で各団体に質問したので、まだそこまでイメージできていないケースも多かったです。この活動が生駒市にあったらいいなという可能性を感じたのは良かったと思います。ただ、市の補助金を使うことで、どれだけ公の意味を持たせるのか、実際に補助金を受けた際に、それに対処する心構えがあるのかは確認したほうがよいという感想です。

（土坂氏）　私も約3年間市の補助金を見てきた中で、この補助金を活用したほうが団体として伸びるのか、逆にプレッシャーに押しつぶされてしまうのかということが何となく見えるようになりました。なかには、事業計画書を書いたものの何かやらなければいけないと萎縮して、ジレンマを抱えてしまうのではないかと感じる団体もありました。また、別の団体では、理想とする社会像が固まっている割には、その過程において柔軟な考え方も持たれているなと思いました。市の補助金を使うよりも、自分たちでやり切ったほうが堂々と政策提言していけるし、団体らしい進め方は何かを模索していけるのではないかなとも感じます。

（田中氏）　イベントが全体のミッションの中でどの位置にあるのかがわかりにくいため、方向性を明確にするには仲間作りが大事になると思います。仲間同士で議論や意見の衝突を重ねることで、自分たちの考えを振り返り、ミッションとイベントのつながりを理解したり、新しいアイデアが生まれたりする可能性があります。この仲間作りをいかに促進させるかが共通の課題だと感じました。

（佐藤氏）　今回は特に理念や目的と、その手段との間に乖離があると感じました。その中で応募理由として、皆さんがすぐーるの活用をあげたように、資金面よりも市を介

したPRが強力な支援になるという印象の団体もありました。初動期の支援が必要な団体と、既に形ができていて、PRだけでよいという団体とのレベルの差もあります。

（6）いこまるっと親の会ねっと

【申請者とアドバイザーの質疑応答】

（アドバイザー）　不登校は、コロナ期の学生も含めて近年すごく増えている印象です。保護者同士や団体同士のつながり、保護者団体と心理カウンセラー、学校の先生や行政などの専門家とのつながりの二種類がありますが、それらをつなぐためのプラットフォームのような役割をされている認識でよろしいでしょうか。

（申請者）　そのとおりです。

（アドバイザー）　プラットフォームを設置し、仕組みとして整備した後は、プラットフォームを起点として、別の場所で一緒に事業を行ったり、新たなつながりを生み出す取り組みが進んだりすると思います。一方で、持続性をどのように担保するのかが重要です。特に保護者は、こどもの成長段階ごとに様々な不安を抱えています。例えば、学校に通っている期間から、卒業後に「働く」という段階に進む際には大きな壁があります。こどもが社会に適応できるのか、実際に働けるのかといった悩みは非常に大きいです。また、支援を受けながら就労できたとしても、今度は親自身が「いつまでこどもを支え続けられるのか」という不安があります。自分が亡くなった後、こどもが一人で生きていけるのかという悩みもあります。このようなライフサイクルの中で、プラットフォームは出入り自由な存在である一方、継続的に関わり続けられる仕組みが必要ではないかと感じます。その継続性をどのように担保していくのか、考えを聞かせてください。私の理解では、このプラットフォームは中間支援的な役割を担うのではないかと想像しています。その立場として、持続性をどのように確保するのかについても、お聞かせください。

（申請者）　立ち上げ時に集まったメンバーは、1年間で既に入れ替わっています。新たに「参画したい」と言う人もいる状態です。私自身は、「選択肢のある社会」をつくっていきたいと考えています。そのために、単に自分のこどものためだけの取り組みではなく、教育そのものを変えていかなければ社会は変わらないという思いで活動しています。自分のこどもが巣立った後も、この取り組み自体は続けていけるものだと考えます。子育て世代は常に存在しますし、新たに関わる方もいれば、入れ替わる部分もあると思います。私自身いつまで活動を続けるか決めているわけではありませんが、いつまでしか続けられないとも考えていません。

（アドバイザー）　確かにメンバーは入れ替わりながら、様々な立場や背景を持つ人たちが

集まることで助け合い、支え合う関係性が生まれていくのではないかと感じます。そのような関係性が構築できれば、主催者がいなくても活動が自律的に動き続けていく可能性もあると思いますが、どのようにお考えですか。

（申請者）　まだそこまでは考えられていませんが、理想です。私がいなくなっても活動が続けられるようにしたいと思いますが、どの団体もそれが難しいと思います。

（アドバイザー）　社会が変わっていくという観点で見ると、以前に比べて選択肢は少しずつ増えていると思います。例えば、「働くこと」や「学校教育を受けること」あるいは「個人で起業すること」など、選択肢が広がってきていると思います。その中で、「不登校」そのものが、今後どのように変化していくのか、私自身も注視しています。少し壮大な話になりますが、社会の変革の方向も見据えながら活動する必要があるのではないかと感じます。難しいテーマですが、その点について考えがあればお聞かせください。

（申請者）　教育フォーラムのテーマの一つに「不登校という言葉の向こう側へ」というものがあります。最終的に「不登校」という言葉自体をなくすことを目標にしています。不登校の何が問題かというと、選択肢が少ないことだと感じています。特に小中学校段階の選択肢を増やすことができれば、「ここが合わなくても次がある」という状況を作ることができ、不登校という言葉そのものをなくせるのではないかと考えています。そのため、学校に限らず本人が1か所でもつながれる場所があることが大切だと思います。尼崎市では、そのような取り組みが献身的に行われています。また、不登校と言っても、背景には個人や家庭の問題など、様々な要因があります。だからこそ安心できる場所があり、「不登校」であることが問題視されない社会になってほしいと思います。

（アドバイザー）　話を聞き、アドボカシーグループとしての可能性について述べられていたのだと理解しました。つまり、横のつながりを作るだけでなく、行政や議員などを通じて社会を変えていく方向に動いていくイメージをお持ちだと感じました。そのうえで、具体的にどのような提案をしようと考えているのか、お聞きしたいです。例えば、「不登校という言葉をなくしたい」ということや、「小中学校における選択肢を増やしたい」という考えを、どのように世の中に広く知ってもらおうと考えているのか、現時点でイメージしていることがあればお聞かせください。

（申請者）　補助金の問題も課題としてあります。他の自治体では支援事例もありますが、生駒市では、現時点で個人向けも団体向けも補助金もなく、活動の継続が難しいという現実があります。ただ、この話は非常に難しい側面もあります。私たちとしては対立ではなく、対話を行う場をつくることが重要だと考えています。社会を変えていくという意味では、同様の活動を行う団

体が増えることも必要だと思います。不登校の問題を個人や家庭だけの問題ではなく、社会全体の課題として捉え、行政による支援制度をどのように実現するかについて、まだ始められていませんが、つながりを持って対話していきたいと思います。

（アドバイザー）　中間支援団体的な動きをする中で、何団体か集まるという話に対して、団体数をもう少し広げていく考えはありますか。

（申請者）　実際に広がっています。「こでまりテラス」と「みんなどうしてる？」という団体さんが一緒に活動したいと言ってくださっていて、いこまるっとフェスにも15団体の参加がありました。横のつながりを広げるというのは、生駒市だけでなく平群町の団体などとも一緒に県レベルで作っていきたいと思います。

（アドバイザー）　意図的に広がりを作るというのは、フェスなどを活用していくということですね。それと、「交流会」とも書かれていますが、これはどのようなものですか。

（申請者）　生駒市の教育委員会、教育政策室と今回のフェスを交え、「学びの多様化学校」というものができ、これからカリキュラムを決めると聞いています。そのような新しい学びの場を一緒に作りたいという思いもあるので、意見交換会のような形です。他の団体にも参加してもらう交流会をイメージしています。

（7）自然環境保全協会奈良

【申請者とアドバイザーの質疑応答】

（アドバイザー）　里山の問題は、生駒市全体の問題で、自然をきちんと理解していくことが重要だと思います。高山方面で活動されていますが、地元の人たちの反応や協力体制、こどもたち向けに発信する方法など、地域との関係性はいかがですか。

（申請者）　確かに高山地区の人たちと密接になることができておらず、継続的な課題だと感じています。外から入ってきた者と、地域の人たちとでは、やはりギャップがあります。一緒に活動できれば強くなるのですが、まだ課題です。

（アドバイザー）　そのような中で、自然観察会をするとなると、地元の協力や許可を得ながら実施されているのでしょうか。

（申請者）　ホームページ上で参加者を募り、こどもたちが歩く観察会を毎月開催していますが、こどもたちに対しては「頑張っているね」と声をかけていただける程度の状態です。

（アドバイザー）　観察しているルートも、特に許可を得ている訳ではないということでしょうか。

（申請者）　一応口頭で行っています。本当は、山の私道に入ったほうがより近くで観

察でき、木などに触ることもできるので入りたいのですが、まだ確認を取れていない状況です。また、地権者の情報にはアクセスができないので、入れるのは普通の農道までになり、多くないです。

（アドバイザー）　高山には竹製品の職人もいると思いますがつながりはありますか。

（申請者）　つながりはあります。以前の話ですが、竹を伐採するボランティアをしたことがあります。また、こどもの体験イベントの中で何かできないかという構想はあります。例えば、生駒の淡竹を育てるようなイベントもいいなと思っています。

（アドバイザー）　保全だけではなくて活用も考えられているということですね。ぜひ地元との連携を深めていただきたいです。

（８）スキマダンスクラブ

【申請者とアドバイザーの質疑応答】

（アドバイザー）　立ち上げ応援コースから発展応援コースに進んだということですが、先ほども不登校という言葉自体をなくしたいという話があり、今回は教育のミスマッチングという話がありました。マッチする場所を作ることが大きな課題だと思います。今回の取り組みの自らステージを作ることと、社会全体のミスマッチを解消していくことが、どのようにつながるのかを聞かせてください。

（申請者）　不登校のコミュニティは当事者だけで集まりがちです。当事者同士の活動は、つながりを作りやすいと思います。ただ、この事業で大事なことは関係なく面白いものであるということです。不登校を売りにした狭い中だけでもいいというわけではなく、出発点として市民の持つ力を発信することで、垣根をなくすことが必要だと思います。もちろん教育に関わる人たちを巻き込むのも大事ですが、ファッションにしか興味がないような人や、音楽が大好きな人、そういった人にも届くものにしていかないと、そういう人もいるよねという感じで終わってしまうと思います。不登校だからということではなく、本当に攻めたアートを作りたいと思っています。それをきっかけに、共通点のない人たちに「不登校って大変なんだ」と知ってもらいたいです。アートにはそのような力があります。

（アドバイザー）　当事者だけの小さな世界を超えて届けるために公開したいということですね。この発展応援コースの補助を市はいつまでも続けてくれるわけではないので、この先自立し、様々な支援を受けられるものに変わっていく必要があると思いますが、そのイメージは持たれていますか。

（申請者）　イメージはあります。ただ、具体的に応援してくれる団体や企業に向けて動いていくことに対して、自分はその方面に疎いため、この1年間でそういったことも成功させたいです。公演までに、サポーター支援的なサブスクリプ

ションなどもできればいいなと思います。

（アドバイザー）　今年度の取り組みの中に、そのようなことも組み込むということでしょうか。

（申請者）　そのとおりです。

（アドバイザー）　話を聞いていると、割と固定した方が来られていと思います。今回の申請書でいうと、定期的な活動に5名ぐらいが参加されるイメージでしょうか。

（申請者）　10名くらいをイメージしています。

（アドバイザー）　自分たちで舞台を作る参加者が20名ぐらいということですが、母数は年々広がっているのでしょうか。

（申請者）　相当広がっていますが、平日の昼間に参加できる人は毎回限られています。昼に起きて動くのが難しいようなこどももいるので、参加してくれているだけでもすごいと思います。市外からの参加者も多いということが特徴で、もっと増やしていきたいので、積極的にSNSやYouTube発信を継続しようと思います。

（アドバイザー）　興味は持っているけれど時間が合わない人も結構いるのではないかと思います。柔軟に選択肢を増やすことはお考えではないですか。

（申請者）　参加者の希望を聞きだすと、ダンススクールのような形になります。舞台に向けた活動は夜にリハーサルをしようと考えているので、平日の時間を変える予定はありませんが、プロジェクトに応じて少し変えてみようとも思います。夏には土日のイベントも考えています。

（アドバイザー）　継続性を考えるならば母数は増やしておくほうがよいと思いますので、そこは柔軟に検討してください。

（8）NPO法人 こどもゆめひろば

【申請者とアドバイザーの質疑応答】

（アドバイザー）　福引はどのような形で実施されますか。

（申請者）　人間スロットと言って、こどものスタートの掛け声とともに、衝立の中から大人が色を出します。色が揃ったら当たりというゲームです。

（アドバイザー）　当たると何がもらえるのでしょうか。

（申請者）　小さなお菓子などです。

（アドバイザー）　そこに射幸心を煽るような仕掛けはなく、小さなお菓子でよかったです。

（アドバイザー）　以前、楽器を借りることがすごく大変とおっしゃっていましたが、その後楽器はどのように集めているのですか。

（申請者）　全然集まっていないです。たくさんの人に声をかけ、学生時代に使用していて使わなくなったという楽器を二つ寄付していただきました。現在、部活動がなくなった学校に借りられないかという交渉をしています。

（アドバイザー）　学校を活動場所として貸し出してもらえるのであれば、楽器も一緒に借り

られるように交渉してもよいと思います。固定費が削減されることで、こどもたちだけでなく、大人の負担も減るので、積極的に交渉することをおすすめします。

（アドバイザー）　部活動の地域移行によってどのような影響があったのか、地域側として行政や学校に知ってほしいことがあれば教えてください。

（申請者）　行政は問題解決に向けて熱心に取り組んでいます。最初の訪問時に「検討しています」と話していたものが、しばらくして「こうしようと思います」と具体的に示してくれることもあります。しかし、学校で進めることが前提になり、どの先生に協力してもらうか、放課後の時間に対応するかといった形で、地域に委ねることは少ないです。地域には受け皿が存在しますが、私たちが積極的に働きかけてようやく名前を知ってもらえる程度です。できれば行政には地域の団体や人に活動を投げてもらえるとありがたいです。一方で、地域の人々は待ちすぎる傾向があります。NPOを立ち上げるまででなくても、例えば少年クラブチームなど、ジュニア時代に活動していた中学生を呼び戻し、放課後や土日に一緒に活動することも可能です。私たちは現在、小学生から高校生まで受け入れていますが、縦の関係は非常に良好です。行政では思いつかないような自由な発想をもとに、柔軟に活動することもできると思います。

（アドバイザー）　全国規模の民間助成金にチャレンジしていただきたいと思います。昨年度末にも話がありましたが、市を飛び越え、仕組みをきちんと横展開するために、今年度はボランティアがいかに気持ちよく活動できるかを試行することが重要です。感謝状のような形式的なものだけで継続的に動いてもらえるのかなど、モデルを検証する最終段階として取り組み、結果を踏まえて来年度以降に横展開を進めてください。その観点から、民間助成金への挑戦を進めていただきたいと思います。

★後半総括

（山納氏）　不登校に関する活動は2団体で行われています。不登校の問題については、「不登校」という言葉をなくしたいという話や、多様性の話があり、当事者だけが集まる状況で、どのように展開していくかが課題です。小中学校に戻ることがゴールではないという認識も共有されていました。このような状況では、制度がそれに対応しなければ、フリースクールへの補助金支援やダンス活動の継続といった形で、延々と対応が続くことになりかねません。部活動の地域移行でも同様の課題があり、既存の受け皿がなくなった際、地域が新しい受け皿となるために模索することが必要です。行政や学校には「地域が担うべきこと」、地域には「理解してほしいこと」が見えてきています。環境が変わって、新しい方法を見つける必要がある時期を迎えており、10万円や30万円程度の補助金で対応し続けるのか

という課題も浮き彫りになっています。行政による地方創生の流れといったデザインと、草の根で自発的に取り組む人たちとの両輪が重要です。啐啄（そったく）の例えのように、外からの支援が強すぎても、中からの取り組みがなければうまくいかず、逆も同様です。行政や学校の支援と、当事者や地域の自発的な取り組みのバランスが求められます。

（土坂氏）　団体Ｈについては判断が非常に難しく、議論する必要があると思いました。一方で団体Fや、団体Gについては、このような活動は今までなかったのだろうかという疑問が浮かびますが、世代交代が行われた結果かもしれません。これまでも同様の活動はあったものの、継続されずに終了したものが新しい人たちによって再び生み出された、という見方です。

（田中氏）　前半に比べ、後半のグループは目標やビジョンが明確でした。しかし、逆にその点が強く出すぎている印象があります。傾向として、異なる立場の人たちが同じテーブルで話し合う必要性を認識してはいるものの、実際には立場が2者程度に限定されているようです。例えば、団体Fは保護者と団体同士、あるいは保護者と専門家という構成です。しかし、不登校ではないこどもの保護者など、異なる価値観や立場の人々も存在します。こうした多様性をもう少し取り込む必要があると感じました。団体Gも、地元の人と地域外から来た人という区分だけでは対象者を十分に絞れません。例えば、郊外と都市部など生活圏が複数ある人もいます。団体Hも同様に、当事者とそれ以外の人の2者で構成されていますが、それ以外の人々も存在するはずで、その部分を明確にすることが地域の中間支援的な機能を強化し、より多様な人が集まる場をつくることにつながります。結果として、地域での新しい共生や創生につなげることができると考えられます。異なる立場の人を同じテーブルに着かせるには、日頃のコミュニケーションがベースになければタイミングは掴めません。したがって、ラウンドテーブルやカフェなど、定期的に多様なテーマで集まる場を設けることが、人やテーマの変化にも対応できる有効な方法だと感じます。

（佐藤氏）　継続している活動をどう支援するかという点が難しいと感じます。先ほどの団体Hの例では、「自分たちでステージをやりたいからコースを一つ上げました」ということに対して質疑がありましたが、それが本当に目的に近づくことなのか、説明を聞いて少し疑問に感じました。もし、その目的のために補助金が必要という意図だとすると、本当に効果があるのかが気になります。例えば、今は平日昼間にしか活動していないものを土日に開催することで参加者が増えるほうが、効果が高いように感じました。このように、継続している活動に追加で行う事業の効果は、次年度以降に出てくる可能性もありますが、助言の仕方は難しいと感じます。もう一つ気が付いたのは、当事者が主体となって活動を進めるものと、団体Ｇの活動のように、当事者ではない外部の人に価値を認めてもらうものとではタイプが異なる点です。その場合の社会性や公共性も異なります。当事者だけで行う場合は、公共性について深く考える必要があり、外部の人が関わる場合は、関わ

る側と活動対象双方の公共性を考慮する必要があります。活動の種類によって、公共性の尺度が異なることが分かりました。前半のプレゼンでも、「自分がやりたいからやります」という活動が、最終的に公共性につながる場合もありましたが、自己実現しながら最終目標にどのようにつなげていくかのプランニング能力が重要です。その点について助言が必要と感じました。次のステップはこれだと示せることが理想です。ちなみに、団体Hがステージを自分たちでやりたいと思ったのは、何か助言を受けた結果なのでしょうか。

（事務局）　去年から継続してもう一度補助金に挑戦したいとおっしゃっていました。発展応援コースとして何か新しい要素をプラスする必要がありました。昨年度は、対象期間外の3月にステージ発表をされました。その際は公共施設ではなく、山の中で保護者たちが自己表現されている様子を多くの人が見るというものでした。発表の場を設けることで、「すごく効果的だった」「心の解放につながった」と感じられたのであれば、発展応援コースに進むのもよいと伝えました。

（佐藤氏）　理解できました。申請者としてはステージ発表をすることで目的達成に近づくと感じられているということですね。それを客観的に判断するとなると、外からはわかりづらいです。

（山納氏）　そのとおりですね。話を聞いていて、不登校という問題をより多くの人に知ってもらうために、ステージ発表をするということであればいいのではないかと思いました。補助金はいつまでも出ません。幸いにして支え手に出会うか、別の補助金を見つけて続けられる可能性もありますが、それを試す1年間というのはあってもよいのではないかと思いました。

★審査員質疑

（審査員）　市民活動に関わるボランティア団体やNPO法人などの視点で考えると、ソーシャルビジネスなども含め、補助金は重要なキーワードです。しかし、補助金制度自体の目的から考えると、行政が関わらなければならない地域課題に対して、市民が取り組むことを資金面で下支えをするというのが基本だと考えます。その中で、課題と手法が少しミスマッチな団体も多く見受けられました。本質に立ち戻ると、やはり行政が支援するのは、地域課題や社会課題の解決に直接つながる事柄だと思います。例えば、団体が資金を獲得するために、地域課題や社会課題に少し寄せたと見えるケースもあり、どのように支援していくか難しく感じます。

（土坂氏）　本補助金は、本来行政としてしなければいけないものを補完する活動しか補助しないというわけではないと理解しています。多様な地域活動や市民活動が生まれることで住民自治の力が高まります。行政だけではとても対応できないような課題を、市民の自主的な活動によって自然に解決の方向に導くことがあります。こうした環境を下支えするのが、この補助金の役割だと考えます。個々の取り組みを「行政を補完する事業であるかどうか」という視点だけで判断すると、かえって市民活動の可能性を狭めるのではないかと感じます。

（審査員）　いわゆる行政が対応すべき課題より、市民が主体的に取り組む中で自然発生的に生まれる新しいコミュニティがベースにあり、そのうえで様々な活動が生まれ、その結果として社会課題や地域課題の解決につながるということでしょうか。

（山納氏）　「A面・B面」という言い方をします。A面は「私たちがやりたいことをやります。資金が足りないので補助金をお願いします」という、やりたいことのための活動です。B面は、「専門性があるから、こういうことをやってほしい」という、依頼を受けて行う事業です。市民活動推進センターでは、この両方が起こり得ます。例えば、豊中市の庄内コラボセンター内に市民公益活動支援センターがありますが、ほかにも保健センターや子育て支援センター、図書館もあり、近くには義務教育学校もあります。こうした環境の中で「高齢者とこどもがつながるために何ができるか」「赤ちゃんと中学生が関われる活動は何か」といったコーディネートを行っています。このとき、助成金の視点は「どのような活動をしているのか」というものではなく「地域のどのような人に、何をお願できるか」という、協働の相手としての視点を持っています。本補助金は、どちらかというとA面事業、つまり「やってみてはどうでしょう」という感じではないでしょうか。「計画があり、仲間がいて熱意が十分なら、小さな規模からやってみてはどうでしょう」という考え方でよいのではと思います。一方で、「行政に代わってこれをやってくれる団体はいないか」というB面は、さらに育った人たちが担うものだと、個人的には考えます。

（田中氏）　お二人と同意見です。A面とB面という話がありましたが、B面の部分は、行政課題や政策に関わる部分だと思います。その部分については、市民活動としてはこれから発展していく団体が対象であるという見方ができます。それこそが、いかに公益的な活動につながるかという点になります。市民提案の場合は、暮らしの中の課題やニーズに関する部分で、行政側もなかなか把握できません。

（佐藤氏）　他の視点で言うと、生駒市の地域コミュニティの課題は、ニュータウンや住宅地開発で街が大きくなったことによる特性から、「土の人」と「風の人」の比率で「風の人」が多い点だと思います。古くからのコミュニティがしっかり残っている地域に比べると、脆弱な部分も多いと感じます。市は、自治会を支援したり、まちのえき事業を行ったり、地域ごとの活動を促進してきました。その中で、テーマ型の活動を支援することは、地域単位ではできないようなことを実現でき、地域のつながりを作る場にもなります。こうした取り組みは、コミュニティの重層性を高める役割を果たしていると思います。従って、行政がそこに期待する部分もあるかもしれませんが、将来に向けた投資的な意味合いもあります。自治会に馴染めない若者も増えていると思われる中、地域課題を解決するプレイヤーが市内に多くいることは重要です。「こんな問題が発生した際には、あの団体に相談すればいい」ということを、市役所が把握しているような、市民の活動力を向上させる役割も果たすと思います。本補助金の前身の制度であるマイサポいこまには、「個人のやりたいことに市がお金を出すのはおかしいのではないか」という批判もありました。公的なお金の使い方として制度が改善された経緯があります。当然、単

なる自己実現ではなく、将来の市民コミュニティ力の向上につながることが必要です。それがないと制度が機能しません。最終目標は、コミュニティが育つことだと考えてよいと思います。短期的な視点だけでなく、長期的な視点も持つことが大切です。次世代が育ち、他の活動にもつながるようであれば応援する価値があります。

（山納氏）　不登校は不登校で、どのように取り組んでいくべきなのかということも、考えたほうがよいですね。

（佐藤氏）　市民活動として、何ができるのかという選択肢を増やす活動と位置付けられるのであれば、一つの方向性として考えられると思いますが、自分がやりたいから、これしかできないからといった理由だけだと違和感があります。

（田中氏）　継続的にそうした活動を行っていくことで、不登校の問題もなくなる可能性は近い将来にあるかもしれません。ゲーマーの例で言うと、かつてはゲームをすることは悪いことのように言われていましたが、今では多くの人が当たり前にゲームを楽しんでいます。そう考えると、長いスパンを見据えた活動というのは、やはり必要だと思いました。

（佐藤氏）　不登校のこどももしんどいけれど、保護者もしんどいということをアピールするための活動だと思うので、それをわかってもらえる他の活動が出てきてもいいなと思います。

（山納氏）　最終的には、社会教育の在り方にまでつながるので、アドボカシーという考え方も必要だと思います。つまり、1日何時間も学校で勉強するこどもだけが「不登校」でないという社会ではいけないということです。

（審査員）　団体Bや団体Iのような活動は、これからもどんどん出てくると思います。先ほど、アドバイザーがおっしゃったように、裾野は広げて応援する必要があります。点数をつけて評価することにはなりますが、基本的にはすべての団体を応援したいという気持ちです。ただ、一定の規模でこのような団体が次々と出てくると、行政側もどのように判断するかは検討が必要だと思いました。また、懸念事項のある団体もあり、アドバイスを行った上で条件付きの採択をするということも可能でしょうか。

（事務局）　条件付き採択という選択も可能です。

（山納氏）　団体Eに関しては、待っているだけでは、参加できる人、参加したい人しか来ません。困難を抱えている人のところに出向いて、チャイを出したり、本を持って行ったりするような活動があればよい気がします。

（土坂氏）　過去に採択された事業の中に、活動の実施方法について事務局がサポートしながら進めた取り組みも見られました。その事例からは、補助金を受けたことで、団体側に「計画どおりに実施しなければならない」という心理的な負担が強く働いていた面もうかがえます。　特に、丁寧な関わりが求められる対象に向き合う活動では、活動の成熟度や実施体制が整う前に補助金を受けることが、かえって団体の負担になる場合もあります。補助金を活用するには、団体ごとに適切な

タイミングがあると感じています。会場費などが課題である場合は、まずは小規模な実践を重ねることで、補助金のプレッシャーを抑えながら、活動の発展性も見えてくるかもしれません。

（田中氏）　タイミングは難しいですね。

（土坂氏）　市民活動を支援するセンターとして、助成金相談の際に今のタイミングではないと伝えることはよくあります。その意味での不採択という場合もあります。

（田中氏）　団体がそのアドバイスを聞いて、「タイミングは今ではないので申請を取り下げます」といった辞退もありますか。

（土坂氏）　あります。

（田中氏）　そのように伝えてあげることがすごく大事だと感じました。

（事務局）　条件付き採択が、団体として合わなければ辞退いただくという方法も考えられますか。

（土坂氏）　補助金額を半分にするなど、申請者に合った採択の方法はいろいろあります。

（佐藤氏）　今年度不採択であっても、来年も挑戦できますし、今年度は半分補助で、来年度は満額補助のような方法をとるのもよいと思います

（事務局）　わかりました。

（山納氏）　申請だけが団体との接点ではないと思うので、日々の相談やこちらからのお願いごとで関係性が豊かになっていけば、十分ではないかと思います。

（審査員）　点数をつけるにあたり、継続性についてはアドバイザーから様々な意見をいただき、なるほどと思いながら聞いていました。各団体やりたいことがはっきりしていて、熱い思いを語ってくださるので伝わってくる一方で、継続性の問題がメンバーを増やせない原因になっているのではないかと思いました。継続性はどの程度重視すべきか、活動初年度はどのように評価し、次の段階に進む際にどの程度シビアに判断すべきかという点が悩ましいです。また、支援期間をどの程度で考えるかも難しいと感じます。

（田中氏）　確かに難しい問題です。決まった基準はないので、団体のミッションが明確になっていて、そのミッションが達成された際に、団体の役割は終了したと考えられます。しかし、ミッションが明確でない場合は、その判断ができません。今回、判断ができない団体がいくつかありました。ミッションや期間、目標値などは、その判断のために設定されるものだと思います。継続性については、社会の状況が変わっているにもかかわらず、時代遅れのミッションを掲げて活動している場合もあるかもしれません。その場合は、実社会の状況と照らし合わせ、必要に応じてミッションを変更することも考えられます。継続性の期間を設定できない理由は、ミッションとの関係が大きいと思います。

（土坂氏）　継続性の捉え方は、市民活動全体において変化してきていると感じています。例えば、団体として組織基盤を強化し、事業を発展させていくことも継続性の一つです。一方で、固定的な組織形態を維持するのではなく、関わる人やテーマに応じて形を変えながら、プロジェクト単位で活動を継続していく形も見られます。ま

た、既存の団体がそのまま継続しなくても、そこで培われた経験や関係性をもとに、一部のメンバーが新たな形で活動を続けるケースもあります。このような場合、団体そのものの存続だけでなく、地域の中で課題に向き合う人材や関係性、活動の蓄積が引き継がれているかという視点も重要だと考えます。継続性をどのように評価するかは、あらかじめ一律に決めるというよりも、地域における市民活動の成熟度や、関わる人々がどのような形で活動に参加し、継続していこうとしているのかを把握したうえで見えてくるものではないかと考えます。

（山納氏）　当事者性が終わる場合もあります。例えば、中学校で不登校だったけれど高校に進学して学校に通い始めた場合、その人には不登校支援に取り組むモチベーションが、なくなるかもしれません。子育て支援でも同じことが言えます。継続のモチベーションが個人の中で薄れる可能性があります。一方で、例えばダンスや自然観察の活動は、そのテーマ自体が続く要素を持っているので、比較的途切れにくいでしょう。ですから、不登校支援であれば、むしろ世代交代をするほうが健全かもしれません。

（土坂氏）　子育て支援と不登校は、そうですね。

（審査員）　毎年必ず一つは不登校支援の団体がエントリーしています。あとは、それが継続しているかどうかを、伴走して見守る必要があると思います。団体 A は、毎年エントリーしていて、構成員は大きく変わっていませんが、どんどん新しい事業を増やす中で、継続できるか心配な部分もあります。

（佐藤氏）　今まで補助事業をやってきたものの、今回の申請はそのちょっと外側のものに見えます。今日聞いた活動からは「これをやりたい」という思いがあまり伝わってこなかったという印象です。

（土坂氏）　団体Aの講座内容のうちセンシティブなテーマについて、伝え方によっては、こどもたちに抵抗感や不安感を与える可能性があります。特に、感受性の鋭い思春期のこどもたちに適切に伝えるためには、かなり高い専門性が求められます。団体としてプログラム化し、専門家に監修してもらうことを想定されていると思いますが、専門家によっても考え方が異なるため、必要に応じて別の専門家の意見も確認できる体制を整えておくことが望ましいと考えます。集客面だけでなく、進め方によっては、現在関わっているこどもたちが離れてしまう可能性もあります。

（佐藤氏）　自分たちがこれまで関わってきたこどもたちをイメージしているようですが、中高生が学校以外の塾でもないところに参加するかというと、難しいと思いました。強く言われないとなかなか学校以外で学ぼうとしない。そうなると、学校などとの連携や、別の既存の場に潜り込ませる方法も考えられるかもしれません。このプログラムだけで新たにこどもを集めるとなると、どんなこどもが参加するかのイメージがつきにくいです。逆に、対象がこれまで関わってきたこどもたちである場合は、公益性という観点で問題もあります。その場合、閉じた活動にならないように、こういった取り組みが大事だという情報発信を積極的にすることが必要かもしれません。